

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(12)

## こころ豊かに暮らせる世界を

——人と人との豊かなかかわりの上に——

黒川 建一

最近鉛筆を使わなくなった、そういう主旨の評論を、確か新聞で見かけて切り抜いておいたはずだ。それを思い出して捜したが、見当たらない。代わりに、サイコロのように使えて、しかもレースカー型の消しゴムをはじめく仕組みのついたヘミニ四駆レースカーえんぴつが子どもたちの圧倒的支持を得ている、という記事の切り抜きがあった。

自分が小学校の頃、鉛筆の六面を削りサイコロ代わりにしているいろいろな遊びに利用した記憶が思い出されて、ついそこに考えが留まってしまうのだが、自分が話題にするつもりでいたのはワープロのことである。ものを書くのにワープロを使うようになって、たぶん七、八年になるだろう。それ以来、鉛筆はほとんど使わなくなった。

ワープロで打った原稿を、FAXで送る。必要な時にはコピーをとる。どの手段も、以前には予想しなかったことだ。しかも、そうした手段さえ、インターネットという新しい波の前では時代遅れのものにみえる。

\*

「世代が変わる 家族が変わる……意識が変わる タブーが変わる……ルールが変わる 教育が変わる 遊びが変わる……境界が変わる……距離が変わる 関係が変わる……形式が変わる メディアが変わる 言葉が変わる……文化が変わる……」。

引っ張り出した切り抜き資料の中に、このようにして二十六項目の〈変〉を並べた全面広告（朝日新聞社・日本新聞協会）があった。

私たちの身の周りで、さまざまなものごとが目まぐるしく流動し変化している。それ

は、目まぐるしく新しい何かが生まれていることであり、同時に、目まぐるしく何かが消え失われていることでもあろう。

いつの時代にもあったことだけれど、よく言われるように、いまは、そのテンポがあまりにも速い。そして、当然のことながら、変化するものごとの内容が問われる。ワープロは、便利さをもたらしたばかりでなく、特定の技能の持ち主でなければできなかつたいくつものことを、普通の人にも可能にさせた。そして引き替えに、その人の手仕事のぬくもりや、その人らしい持ち味を、他の人には伝えにくくさせた。

私たちの身の周りの、さまざまな面での変化の根底には何があるのか。変化の軸は何なのか。私には、そのとらえようがわからない。これから先、私たちは、新しい何を生みだし、これまでの何を失うのだろうか。

二十一世紀に向けて、またひとつ、新しい年が明けた。新聞の紙面には、今日に至る繁栄の流れを受けて、人間や社会の未来を明るく展望する内容の記事が目につく。

私も、そのように未来を思い描きたい。しかし、そうするには、ひとつの努力をしなければならぬように思う。日常生活の中で溜め込まれてきた私の実感が、素直にそういう願いへとつながっていかないからだ。

日常生活のいろいろな場面での経験を通して、しつこく私につきまとう実感は、人間関係を好ましくつくることの難しさである。もっとわがままな言い方が許されるなら、周囲の人への目配りが薄れていくように思える、今の世の中の状況に対する不安と不満である。

かつて、私は、それらを若者世代の問題だ

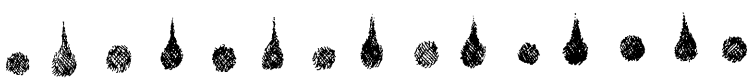
\*

と思っていたが、この頃、そうではないと思うようになった。むしろ中高年の世代こそ、その先駆けだったのではないか。そして、いまは、幼児たちにもその気配を感じる。

切り抜きの中に、車内の座席をめぐるトランプや、エスカレーターの乗り方をめぐるトランプの記事がある。「罪悪感薄れる子どもたち―人前でポスター盗んでも平然」などの、人目をばばからない若者たちの行為を話題にした記事もある。傘やバッグの持ち方、他人の目の前の横切り方、話し声の大きさなど、自分の感覚からすれば腹立たしく思える体験と重なって実感が増幅される。それは、さまざまなものごとの変化のなかで、私にはいちばん気がかりな変化の実感である。

\*

ものごとがどのように変わっても、人が、他の人たちと一緒に生きることが変わらない



かぎり、周囲の人たちに目を向けることの大切さは変わらない。世間体を気にするような目ではなく、他を同じ一人の存在として認める目がなければならぬ。

受験勉強や仕事に、時間のゆとりも気持ちのゆとりも奪われ、便利な道具だけが溢れる生活の中で、多くの人たちが、他の人たちとの関係を軽く浅いものにしてきたのではないか。特定のものごとの値打ちにだけ関心を奪われて、よほど愛着を感じる人か、さもなければ利用できる人以外は、意識しなくなってしまうのではないか。そして、自分がそうであることにも気づかないようになっていくのかもしれない。私自身の振る舞いに、そのことを知る。

人とじかに向き合い、じかにふれ合う体験を、もっとだいたいにしなければならぬ。もう少し広げて言えば、周囲の物とじかにかか

わり、自分の手でじかにものを生み出す体験も、もっとだいたいをしなければならぬ。それは、自分の存在を確かめる体験である。そして、他者の存在を知る体験でもあり、他者との関係を創る体験でもあるだろう。

幼児期の子どもたちから、その体験の機会を奪わずにおいてやりたい。二十一世紀に向けた願いであり、今の願いであり、いつも変わることはない、あたりまえの願いである。

\*

二十一世紀に向けた幼児教育を考えることは、「こころ豊かに暮らせる世界を創ってほしい」という私たちの願いを、その世紀に生きる幼い子どもたちに託することである。自分のためばかりでなく、若者たちや幼い子どもたちのことを考える時、その願いは強い。雑多で混沌とした変化のうねりから、その先を予測することが、私にはできない。しか

し、こころ豊かな暮らしのいちばん根底に、周田の人たちとの豊かな関係が必要だということ、間違いないと言える。豊かな関係は、他者の存在そのものを認めることで成り立つ。それを支えるのは、自分自身の存在の大事さを感じ、その思いをしつかりと胸の中にたたみ込んでいく体験だ。幼い時期、自分のすることを周田の人たちに温かく受けとめてもらえる、そういう体験だ。

「どろんとした空気が、私たちのまわりにある。停滞。日だまり。踊り場の一服。先が見えない。ふつうの人のふつうの暮らし。さて、どうしよう。自分にこもる、うずくまる、群れにはぐれる、道草をはむ。人はいま、牛になる。……学校に行かず、仕事もしない。駅のコンコース、コンビニやファーストフード店の前の路上に十代の男たちがべったりと座り込む。自分のことを『ブー』と呼

ぶ。……どの街にも、ブーが座り込んでいる。自分が座った床のすぐそばにつばを吐く。ベルが鳴る。ゴミをポトンと落とす。天から音楽を聴いたように、時折、ダンスのステップを踏む。来世紀、彼らが大人になる」  
(朝日新聞「牛になる」一九九七・一・三)。  
自分の存在の大事さを一所懸命に感じ取ろうとしているであろう、この若者たちが、こころ豊かに暮らせる世界をみずからの手で創りだす世紀になってほしい。そして、同じ願いを、幼児たちにも託したい。その願いは実現するだろうか。

私たち大人が、それぞれの若者や幼児の、人としての存在を本当に大事にしながら彼らとかかわるように、自分を変えていけるかどうか、それが最初の鍵だと思ふ。

(愛知教育大学・同附属幼稚園)